

## 新春法話 「足るを知って身を正す」

謹んで初春のお慶びを申し上げます。

ようこそ、お地藏さんのお寺 正光寺にお参りいただきました。

新年を迎え、一言新春法話を述べさせていただきます。

お正月という言葉の本来の意味を皆さま知っておられますか。正月とは「修正(しゅしよう)の月」の略で、「心身を正しく修める月」という意味があります。昨年(ごんねん)の自分の行動、言葉、心のありようを振り返り、自らを慚愧(ざんき)し(はずかしめ)、悪いところがあれば大いに反省し、新たなる気を取り込み一年の安泰を願って心身を正しく修める大事な月ということ、

「修める」には、心や行動が乱れず正しくするという字義があります。そして、悪いところとは、つまり「煩惱」という心の乱れ、汚れであり、特に三毒煩惱に挙げられる 貪(むさぼ)り 怒り 無知の心は、人の諸悪と苦しみの根源とされ、仏教では何事も焼き尽くす火にたとえられます。

ところで、煩惱と欲を同じ様に考える人もいますが、欲を持つということ自体は決して悪いことではありません。私たちの幸多き実りある人生を送るためには、五欲(財欲、色欲、食欲、名誉欲、睡眠欲)にみられる欲がなければなりません。欲は命あるものであれば、あって当たり前のことです。

しかし、欲は欲を産み際限のないものでもあります。欲に欲をかけば、欲は煩惱と変化し必ず心身に災いと苦しみをもたらします。

「過ぎたるはなお及ばざるがごとし」という論語の教えにあるように、欲深さには日ごとの注意が大事です。そこで、「知(ち)足(そく) 足るを知る」という教えが役に立ちます。

お釈迦様の臨終の場面を描いたお経「遺(ゆい)教(きょう)経(ぎょう)」に「諸々の苦しみをまぬがれたいならば、知足の教を学びなさい。知足の教は富樂安穩を導く教えである。知足を知らぬものは豊かであっても心は貧しい。知足を知るものは、貧しくても心は豊かである。知足を知らぬものは欲望の奴隷になる。」と「知足」の教えが説かれています。足るを知るということは、満足を感じるということです。

欲を持って生きる中で、恵まれていると感じたならば、欲をほどほどにして慎めば、物事は円滑に進んでいきます。

「衣食足りて礼節を知る」という言葉がありますが、果たして今の日本人に礼節はあるのでしょうか。

礼節をわきまえず私たちは我田引水(ごうでんひきみづ)的なものの考え方をしてきたのではないのでしょうか。結果、格差社会、無縁社会と言った世の中を産み出したのかもしれない。

修正の月を迎え、足るを知って身を正すことで心に余裕のある生活を送っていただきたいと思えます。

心の余裕が、自然と私たちに慈しみの心を芽生(め)えさせます。私たちの慈しみの心が原動力となつて、多くの苦しんでいる人々を助けることを願って、新春の法話とさせていただきます。

平成二十九年 丁酉 元旦

延命山正光寺 住職 高野 隆 晃